



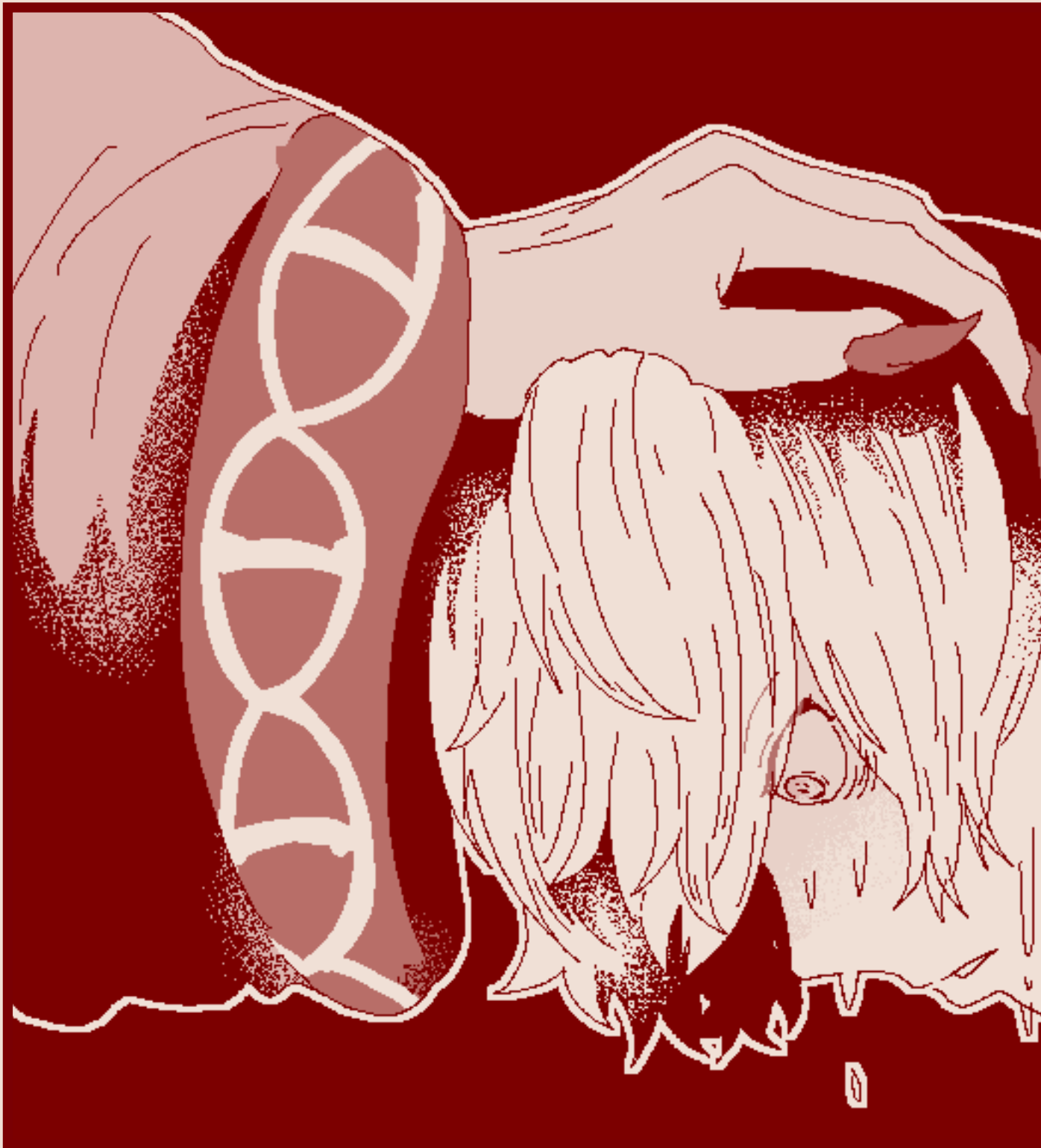
勇太が巨大な卵に吸い込まれ鬼塚と一緒に消え、俺はルクスモンに連れられ、勇太を追って DW に来た。

その時、勇太の安否も不安だったが、それと同時にどこか期待している自分がいた。クソみたいな周囲とそれに屈した自分。

それが変わるんだと思った。

勇太には、軽口で馬鹿にしといて自分が漫画の主人公みたいに…あいつの言うヒーローみたいに今度こそ、自分は誰かを助けられるんだ。

あの時みたいに、勇太が母さんに立ち向かったみたいになれるんだと期待していた。強者に屈せず、自分を曲げない自由を手に入れられると思った。



だが、俺は"また"屈した。

ルクスモンに連れて行かれたのは、デーモンの拠点だった。

どうやら、デビモンと何か企んで俺を引き渡したらしい。

デーモンがどういう存在なのかは、一目で理解できた。

しかし、結局俺は強者に跪き、自分を曲げ、生き延びた。

強者の言うままに、関係のない多くを、自分の命と引き換えに蹂躪した。

自分が心底嫌になる。

何度も嘔吐し、こちらを見る死んでいく命の視線を吐き出そうとした。

だが…同時に、何か自由になれた気がした。

自分の心に言い訳をして諦めてしまえば楽になれた。

「命が掛かっているんだから仕方なかった。」「勇太を探すため、勇太を逃がすだけが目的だから他は知らない他人じゃないか。」

一部の強者に屈すれば大多数の弱者の前では、俺は今までになく自分の心を曝け出して自由に振舞える。

なのに…なのに勇太。

お前は自分より圧倒的に強者であるデーモンに、なんで立ち向かえたんだ。

なんで、お前にだけは見られたくなかったこの卑劣な姿を暴いたんだ。

…なんで、お前は、俺をそこまで惨めにするんだ。

…もう嫌なんだ…いいだろ？惨めだって楽になったって…鬱陶しいんだよ…お前の!!!俺を信じてるその目が!!!

俺は…!!俺は!!!!!!



轟音を上げ、空に2つの巨影が飛んでいく。

「良子！」

「うん。」

…おかえりヒーロー。」

「感じているかケルビモン！」

お前と私の見染めた人間が雌雄を決しようとしている!!!」

「…。」

デーモンとケルビモンが殴り合いながら、喜々としデーモンが話しかけてくる。

「今度こそ！お前の見染めた人間を叶が殺し、あいつは自由となるだろう!!!」

「はぁはぁ…せないさ。」

「なに？」

「勇太がさせないさ!!!」



インペリアルドラモンがヴォルケニックドラモンを上空から急降下し、地面へ叩きつける。

昇る煙を払い、2匹の巨獣がぶつかり合う。

ヴォルケニックドラモンは、翼をマントの様に格納し二足の獣のような体型に変形し、そのまま近接戦を行う。

「なんなんだよ…!!! 勇太!!! お前はなんなんだよ!!!」

どうして俺の前に立つんだ!!! 全部を奪われたのに!!! 誘惑を断ち切って! それでも何も失わないで俺の前に立つんだ!!!」

「なんでって! 叶を助きたいからに決まってるだろ!!」

「ふざけんな!!!!!! 俺を憐れんでるからか!!!!??? 本当の選ばれし子供になったからって!!!!」

なんでお前だけなんだ!!! なんで!!! なんで!!!?? ?」



インペリアルドラモンが空中に舞い上がり、小型のメガデスを幾つもヴォルケニックドラモン目がけて射出する。

「ヴォルケニックドラモン!!!」

「分かってる!!! 勇太!!!」

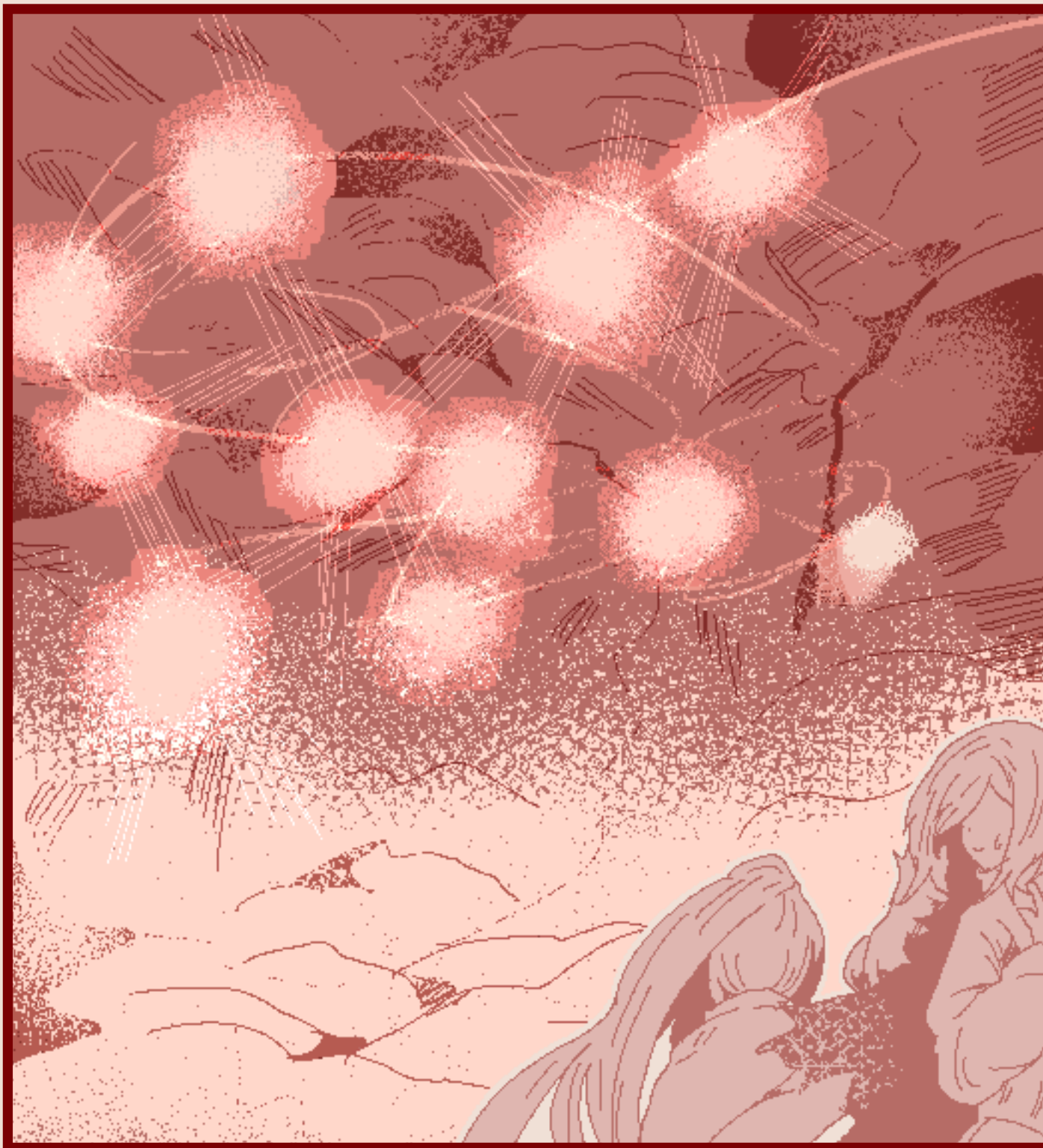
「ワイルドブラスト!!!!!!」

ヴォルケニックドラモンが翼を羽ばたかせると黒色火薬が舞い上がり、メガデスを誘爆させていく。

「行くぞ!! しっかり掴まってて 勇太!!!!」

ヴォルケニックドラモンの羽根から巨大な炎を噴出される。

瞬間の静寂の後、超高速でヴォルケニックドラモンがインペリアルドラモンを追い空へ舞い上がる。



「速いな…。」

「颯乃！よそ見…なんだアレ。」

慎平が見たのは、超高速でぶつかる2つの影とそれに遅れるように起こる複数の爆発の光であった。



一際大きな爆発が起こった後、1つの影が上空から落ちてきた。

「がはっ!!!!」

今度は、インペリアルドラモンがヴォルケニックドラモンに撃墜され地面に叩きつけられる。



「クソ!!! なんてお前だけ特別なんだ!!! なんて!!!」

「俺が特別!? なんてそうなるんだよ!! 俺はずっと叶に憧れてたんだ!!! 俺より勉強もスポーツもなんでもできて!!! お前の方がよっぽど特別だったじゃないか!!!」

上空からインペリアルドラモンを追撃しようとする勇太に叶が吠える。

「違う!!! お前は!! あの時もデーモンに立ち向かった!!!」

自分より強い相手へ!!! 全てを失ってもここまでやって来た!!!」

「特別じゃない!!! 勇気を出しただけだ!!!」

自分が納得できないから!!! 皆に笑顔でいてもらいたいから!!!」

「それが特別なんだよ!!! 誰もが勇気を出せる訳じゃない!!! お前が特別だから勇気を出せるんだ!!!」



ヴォルケニックドラモンの追撃をインペリアルドラモンは後退し、避ける。
無数のメガデスの光球からレーザーをヴォルケニックドラモンへ射出する。

「! 勇太!!!」

「ああ!!!」

勇太がフェアリモンの脚で風を巻き起こし、廃墟のガラスを巻き上げる。

更に、ヴォルケニックドラモンが前方を爆発により急激に加熱させレーザーを屈折させる。

「俺は特別ななんかじゃない! 誰だって勇気があれば!!」

「特別なんだよ!! お前はそれが分かっている!!!」

だからそんなに軽く言える!!! 周囲はそれに乗せられて苦しむんだ!!!!

お前は病原菌なんだよ!!!! いたずらに希望をまき散らして、お前に焼かれて絶望する!!!!

お前はいちゃいけないんだ!!!! 死ね!!! 死んでくれ!!!!」



「ふざ…けんな!!!!!!」

インペリアルドラモンのレーザーを吹き飛ばし、ヴォルケニックドラモンが尾の刃でインペリアルドラモンの胸を切り裂く。

「がっ!!!!!!」



瞬間、出来た際にヴォルケニックドラモンはインペリアルドラモンヘラッシュで殴りかかっていく。

勢いにより、インペリアルドラモンは後方へ引き釣られるように下がっていく。

「俺だってデーモンにひとりで立ち向かえない!!!」

「だけど…!!!一緒に戦ってくれるヴォーボモンにデビドラモン!アンティラモンにサンドリモン!!!光がいたから戦えたんだ!!!!立ち向かえたんだ!!!」

「叶だって!!!!!!」

「ふざけんな!!!!!!!そんな!!!そんな訳があるか!!!誰だって強い者に怯えて!従う!!!」

「それこそが世の中の理なんだよ!!!」

「だから俺は魂を売った!!!邪魔なお前を殺して、力を手に入れば、今度こそ自由になるんだ!!」

「そんな事のどこが自由だって言うんだよ!!!ただの言い訳だろ!!!諦めて罪悪感から逃げるために自分の心に嘘を付いてるだけだ!!!そんな事したっていつか後悔だけが残るだけだ!!!!」

「それに!!!!!!」

「それの何が悪い!!!世の中の奴は、お前以外そうなんだよ!」

「それになんだよ!!!!!!」



「俺は叶がいたから勇気が出せたんだ!!!叶がくれたゴーグル!勇気を出すためにって!!!だから俺は!!!!」

一瞬その言葉に叶の脳内に過去の記憶が蘇る。

同級生を見殺しにした夏、ポロボロになりながらも笑顔を向ける親友の脳に焼き付いた光景が。

「黙れええええええええええええ!!!!!!!」



叶のデジヴァイスが強い輝きを上げ、インペリアルドラモンがヴォルケニックドラモンのラッシュを弾き、カウンターで一気に吹き飛ばす。

ヴォルケニックドラモンはビルに叩きつけられ、轟音と激しい煙が舞い上がる。



インペリアルドラモンが空へ舞い上がり、メガデスを生成する。
それは今までのサイズとは比べ物にならない大きさであった。
「…勇太、お前の勇気ってやつでこいつが止められるか？
この大きさならお前の大切な仲間だって、オグドモンにいる鬼塚だって殺せる。」
「…っ。」



「やめろ叶!!…俺だって分かるさ!今だって怖い!ヴォーボモン達がいなくなった時、自分の無力感から逃れるために必死に言い訳した!!!でもそれじゃ駄目なんだよ!!

だって、自分の心には嘘はつけないから!!!誰がなんて言おうと叶自身がなんて言っても叶が優しいのは俺が一番分かってる!!!

だから…もうやめるんだ!!!これ以上こんな事をして他人も自分も傷つけ続けたら心が壊れるぞ!!!!!!

本当の叶を思い出せ!!!!!!目覚める時は今なんだよ!!!叶!!!!!!」

「お前に…お前が俺を語るのか!!!!!!???お前が!!!!!!俺をこんなに…!!!!!!ふざけるなあああ!!!!!!!!!!!!」

メガデスの光球が更に急速に拡大していく。



「勇太…。」

勇太は俯きゴーグルを握る。

「…ごめん、こんな事に付き合わせて。」

でも俺は…それでも。」

「分かってる…一緒さ、だってパートナーでしょ？」

「うん…!!」

勇太のデジヴァイスが輝きを増していく。

メガデスが拡大しきり、緩やかにしかし確実に落ちはじめてきた。

「いくよ!!!!勇太!!!!」

「ああ!!!!いこう!!!!ヴォルケニックドラモン!!」

勇太は顔を上げ、真っ直ぐに上空の叶の顔を直視する。

しかし、すぐにメガデスで覆い隠され見えなくなる。



「『ヴォルケニック・フレア!!!!!!』」

ヴォルケニックドラモンから灼熱の炎がメガデスへ放射される。

「ぐっ!!!!??」

しかし、巨大なメガデスに徐々に押し返されていく。

「そうだ、これが現実なんだよ。」

どうしようもないのが…そうなんだよ勇太。」

力を急激に消耗し勇太が膝を着く。

メガデスが目の前に迫ってくる。

走馬灯のように過去がフラッシュバックする。

その中にある記憶。

叶と一緒に笑い合っていた。

「…それでも。」

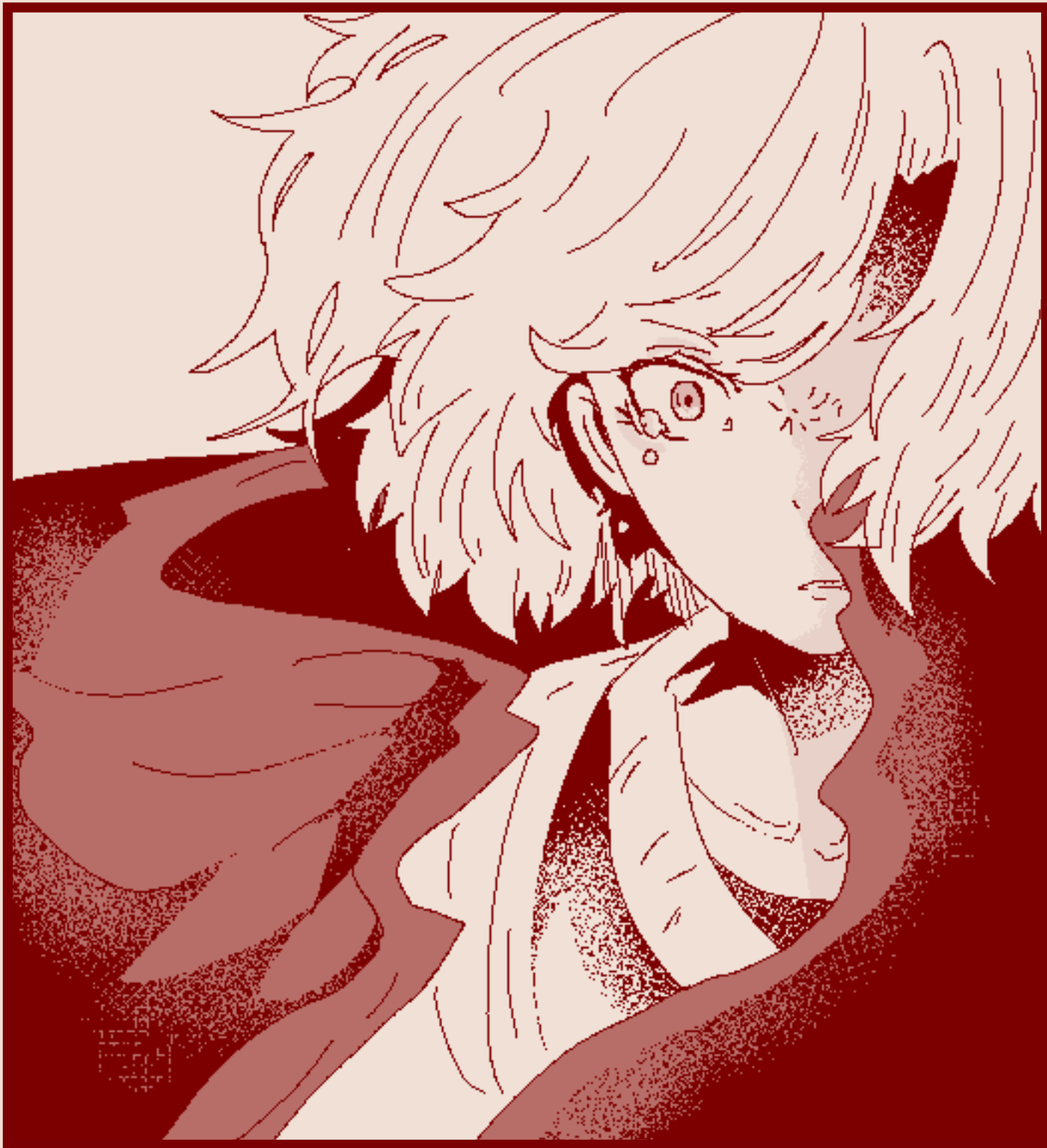
諦められるかああああああああああああ!!!!!!」

勇太のデジヴァイスが更に輝きを増し、ヒビが入っていく。

ヴォルケニックドラモンの力が増し、徐々に押し返していく。

「なんで…」

この状況で叶から漏れ出たのは小さな一言だけであった。



そこには劇しい光があった。

なぜだ、勇太。

なんでお前はそれでもと立ち上がり、俺に手を差し伸べる。

俺は、お前が憎い。

お前という自分が惨めになってくる。

正しい事を貫きたいと思っても、優しくありたいと思っても、強い者に屈し、他人を疑る。

俺は、強くあろうとするのに疲れた…お前に見限られたくなくて虚栄の脆い仮初の自分を演じるのに。

なのになんでお前は、俺に手を差し伸べる。

なんでお前は俺の様な人間に太陽のような眼差しを向ける。

なんで俺と一緒に堕ちてくれないんだ。

お前が堕ちてくれれば、俺も一緒に堕ちれたんだ。

それで良かったじゃないか、一緒にいられれば。



勇太…。
俺はただ…お前の隣にいたかっただけなのに。



「はぁ…はぁ。」

インペリアルドラモンを打ち破り、落ちた先に降りた勇太達の前には退化し、
叶を庇うブイモンであった。

状況を鑑みて、これ以上の反撃はないと感じたヴォルケニックドラモンはヴォー
ボモンに退化する。

「大丈夫。」

話をするだけだから。」

勇太はブイモンに微笑み、敵意がない事を伝える。

それを見て了承したのか、ブイモンは手を降ろし、勇太が横切るのを見送った。

「…っ。」

勇太の視線に叶は目を逸らした。

「叶…。」

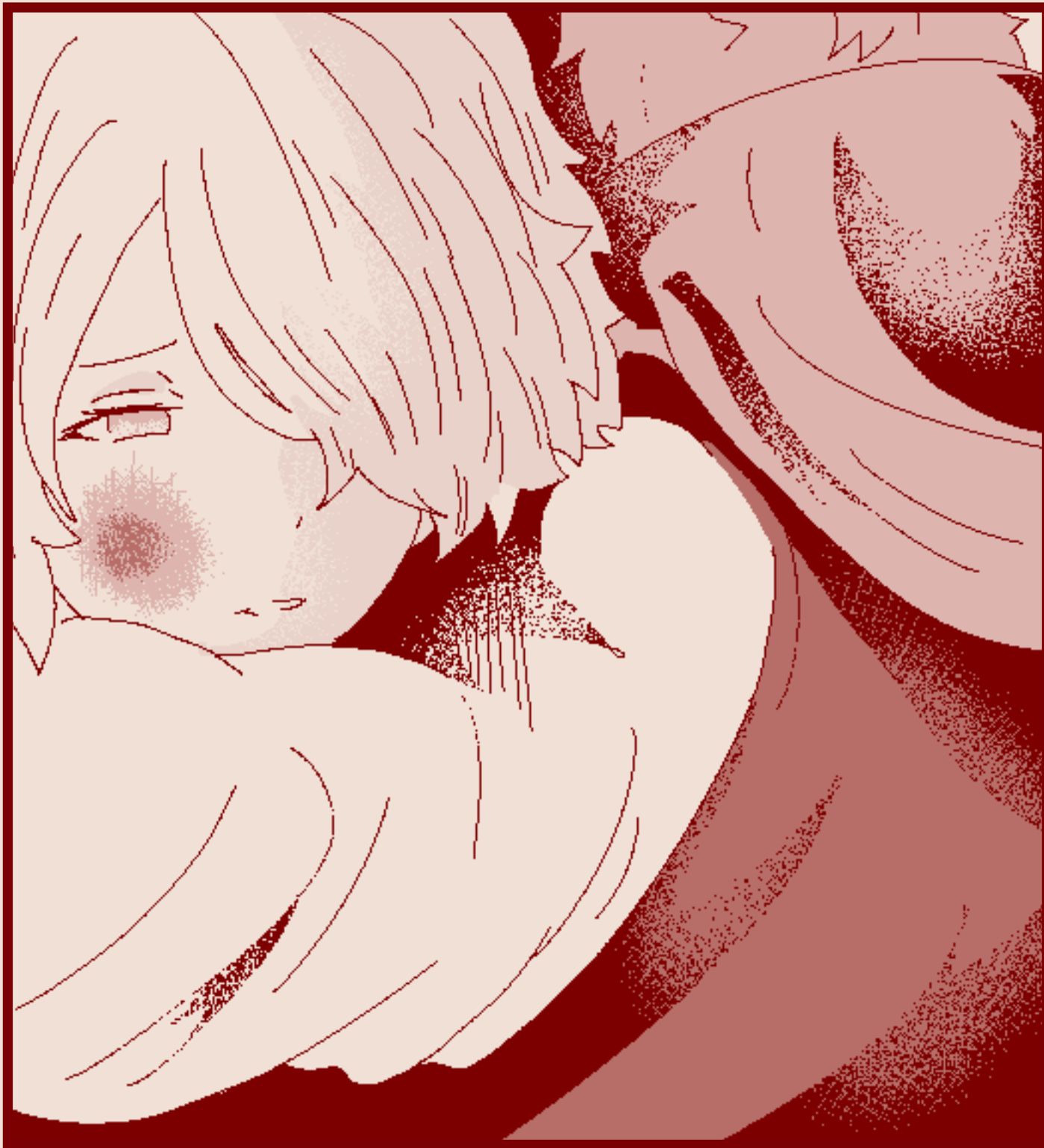
「ゆ…ごふ！」

答えようとする叶を勇太は思い切り殴り抜けた。

(…いや、なにもしないって勇太。)

ヴォーボモンとブイモン、そして叶は呆気にとられた。

倒れ込む叶を勇太は抱きとめた。



「ごめん…叶。
叶が苦しんでいたのに全く気付いてなかった。
俺は…俺は叶に勝ちたかった。
ずっと悔しかったんだ…なんでもできる叶が。
テイマーとしての自分を認めさせたかった。
そのせいで気付けなかった…叶が苦しんでるのを知ればもっと早く…。」
「勇太…。」



叶と勇太を見守りつつ、ヴォーボモンはブイモンに語り掛けた。

「ねえ、どうしてブイモンは叶の為に戦ったの？」

ソドムでも蹴られて…いつも酷い目に遭わされてたんでしょ？」

「…分からない。

ただ…自分を重ねたんだと思う。」

「重ねた？」

「俺は並行世界でデーモンの野望を何度も止めたブイモンの対抗手段でしてクローンとして作られた。

デーモンのやってる事は間違いだと分かってる。

でもパートナーもいない俺は、ただの成長期で…いや、言い訳だな。

怖かったんだ…殺されるのが…死ぬのが。

そしたら情けなくなった並行世界の自分は、あれだけ輝いているのに自分はなん
でって…。

叶もそうだった。

でも、叶はそれでも足掻いていた。

だから…放っておけなかったんだ。

もしかしたら、叶の行く先で間違った俺達でもずっと自分の心を縛っているものか
ら自由になれるかもしれないって期待してたんだ。

だから…。」

「そっか…。」

「解ってる。

本当に俺がやらないといけなかったのは…。」



「叶…これ返すよ。」

「これって…。」

勇太は首に掛けていたゴーグルを渡した。

「俺の…きっと勇気の源。」

今の叶には、きっとこれが必要だから。

ここから真っ直ぐいけばすみれさん達のいるトレイルモンの場所に行ける。

大丈夫、きっと帰れる方法があるはずだよ。

だから…これ以上自分を責めないで、叶が悲しい顔してると俺も辛いよ…。」

「…。」



「じゃあ、俺行くから。」

「!お前…!

駄目だ…!殺されるぞ!」

叶は勇太がデーモンのところへ向かう事が分かった。

「大丈夫。

俺がきっと叶を守ってみせるよ。」

振り返る勇太が叶には劇しい光に包まれているように見えた。

叶は項垂れ地面の土を握った。

止められない自分がいた。

それを齒痒く、悔しむ自分がいた。

胸に熱いものが、鼓動が高鳴るのを感じた。